

朝河貫一とジョン・ケアリー・ホールの往復書簡の紹介

—— 1910年代英語圏における日本史研究と日本アジア協会の歴史家たち ——

佐 藤 雄 基

はじめに

20世紀前半にアメリカ・イエール大学で長く教鞭をとった朝河貫一の *The documents of Iriki* (『入来文書』1929年) は、日本の中世古文書を英訳し、日本封建制を初めて本格的に紹介したものであり、英語圏における本格的な日本史研究の先駆として知られている。『入来文書』段階における朝河の比較封建制論は、比較の参照軸としてフランス封建制論を用いたこと、南九州という具体的なフィールドに立脚した比較史という点に特徴をもつ。このことは、主にドイツに参照軸を求めた同時代の日本国内での日本史研究とは一線を画する。

朝河が南九州を比較研究のフィールドに選んだきっかけは、1919年の九州調査旅行での入来文書との出会いであった。一方、フランス封建制を比較史の基準に据えるに至ったきっかけは、1915年夏のヨーロッパ調査であった。第1次世界大戦中であったためドイツには行かず、イタリア・フランス・イギリスの3国を回った。帰国後、東京専門学校時代以来の親友であった五十嵐力に宛てた書簡で、朝河は以下のように述べている⁽¹⁾。

… (三) 欧洲法制史の或方面につきては、久しく心掛居候へども、今夏英国にて此道の大家一両名と會談して後、やゝ方法を改めて佛国法制史を中心として着々研究の歩を進むることゝ致候。かく決したる理は不申上。…

「大家一両名」との会談が、フランスを軸とした比較封建制論を構想した契機であったと語られている。前稿では、フランス封建制を勉強するように助言した葉書が残されていることから、「大家一両名」の一人が、イギリスの法学者のフレデリック・ポロック (Frederick Pollock 1845-1937) であることを明らかにした⁽²⁾。もう一人の「大家」は、ポロックほどには明確な証拠はないが、状況的に考えて、おそらくはイギリスの元外交官で、日本封建法研究の先駆者であったジョン・ケアリー・ホール (John Carey Hall 1844-1921) であろう (第2次世界大戦後のアメリカにおける日本史研究の大家ジョン・ホイットニー・ホール (John Whitney Hall 1916-1997) とは別人)。朝河とホールの間の往復書簡が残されているほか、関連史料の存在から、両者の交流の様子を具体的に明らかにすることができる。

英語圏の日本研究 (ジャパノロジー) に関しては、明治期や第二次世界大戦後の研究はあるものの、本稿が対象とする1910年代は、関係者の足跡を含めてよく分かっていないことが多い。基本的な史料の所在や事実関係を積み重ねていく必要がある。日本史史料の英訳という朝河の仕事自体も、ホールのような欧米人の日本研究者による史料英訳の仕事の系譜上に位置づけられる必要がある。その際、日本からアメリカにわたって日本史研究を発表した朝河と、欧米人の日本研究者とのスタンスの異同についても検討する必要がある。

本稿の目的は、朝河とホールの往復書簡の史料紹介である。朝河貫一の人物史研究としては、「大家一両名」の一人がホールである蓋然性の高さを確認するとともに、英語圏における日本史研

(2)

究の史学史として、1910年代のイギリス系の日本史研究者の様相を紹介したい。

1、ジョン・ケアリー・ホールの人物像

ホールは、1844年1月22日に北アイルランド・ロンドンデリー州コルレインで生まれた。ベルファストのクイーンズ・カレッジを卒業した後、1867年1月駐日イギリス公使館付通訳官見習として来日し、一次帰国して1881年にミドル・テンプルで法廷弁護士（barrister）の資格を得て、1888年から翌年にかけて上海の高等法院の判事補代理を務めたほかは、神戸・横浜・函館・長崎で外交官として活動した。1902年以降は横浜総領事を務めた。日本・中国研究に従事するかたわらで、フランスのコントの実証主義哲学に関心をもち、コントの弟子であるピエール・ラフィット（Pierre Laffitte 1823-1903）の中国文明論と道徳論を英訳している⁽³⁾。1914年に退官してイギリスに帰国した後は、ロンドンの中国協会の設立に関わるほか、コント派の実証主義教会（positivist church 人道教）の一員となり、実証主義評論（*Positivist Review*）に貢献した。1921年10月21日にロンドンで死去した後は遺言によって、1913年に死去したアグネス（Agnes 1850-1913）夫人の眠る横浜山手の外人墓地（6区2）に埋葬された⁽⁴⁾。

ホールが日本滞在中に主要メンバーとなり、1912・13年には会長を務めた日本アジア協会（The Asiatic Society of Japan 略称 ASJ）は、1872年7月29日に横浜の外国人産業会議所で設立され、今日まで続く団体である⁽⁵⁾。日本及びアジア諸国に関する調査と情報の収集、日本研究者の交流、研究成果を発表する機関誌の発行を目的としており、1874年以降、『日本アジア協会紀要』（*Transactions of the Asiatic Society of Japan*）を発行している。同誌46巻（1918年）に朝河は「日本封建制度の諸相」という論文を発表している⁽⁶⁾。ホールもまた日本封建法の英訳を発表していた。34巻（1906年）に御成敗式目（*Japanese Feudal Law: the Institutes of Judicature: being a translation of "GO SEIBAI SHIKIMOKU"*）、36巻（1908年）に建武式目（*Japanese Feudal Laws: II – the Ashikaga Code*）、38巻（1911年）に江戸幕府の法令（*Japanese Feudal Laws: III – the Tokugawa Legislation Part I*）の英訳を発表しており、1979年に *Japanese Feudal law*（University Publications of America）としてリプリント版が出版されている。この他に、11巻（1882年）に「韓国の西海岸及び都の訪問記」、38巻に「仏教における墮罪」（*Dazai on Buddhism*）という小論を発表したが、ホールの主な研究対象は日本封建法の英訳と紹介であった。この点で、日本封建制に関する史料英訳と紹介に努めた朝河貫一の一先駆者ともいえる。

2、朝河・ホール往復書簡の概要

朝河とホールとの往復書簡は、福島県立図書館所蔵「朝河貫一文書」にホール書簡が4点（整理番号 E146）、イエール大学図書館所蔵「朝河ペーパーズ」（請求記号 MS40）の中の「朝河貫一日記」に控えられた朝河書簡1点、計5点を確認できる⁽⁷⁾。5点ともに、朝河関連書簡をまとめた『朝河貫一書簡集』（早稲田大学出版部）には未収である。

- ① 1911年3月13日付ホール書簡【手稿】（福島）
- ② 1915年9月5日付ホール書簡【手稿】（福島）
- ③ 1916年3月22日付ホール書簡【手稿】（福島）
- ④ 1917年12月2日日付朝河書簡【手稿】（日記）
- ⑤ 1918年2月20日付ホール書簡【タイプ打ち】（福島）

以下、それぞれの書簡の内容とそこから判明する事実関係を整理する。翻刻は後掲する。

3、【書簡①】1911年3月13日付ホール書簡

現存する両者の往復書簡は1911年に始まる。朝河は論文「1600年以降の日本の農村統治に関するノート」⁽⁸⁾をホールに謹呈することを伝えたようである。その書簡は現存していないが、それに対するホールの返事が書簡①である。「BRITISH CONSULATE-GENERAL, YOKOHAMA.」(横浜イギリス総領事)とタイプ打ちされた用紙に書かれている。

ホールは、当時イギリスの外交官として日本にいた。『日本アジア協会紀要』38号に掲載される予定の徳川幕府法令の英訳(前述)が刊行されたら、朝河に謹呈することを約束している。但し、慶應義塾大学で経済学などを教えつつ、協会の事務局を務めていたヴィッカース(Enoch Howard Vickers 1869-1957)が、1910年にアメリカに帰国したため(母校ウェスト・バージニア大学の経済学教授になった)、紀要の刊行は遅れていた⁽⁹⁾。

朝河は1906年にイエール大学図書館・アメリカ議会図書館の依頼を受けて日本語図書収集のために日本に帰国しており、「農村統治」論文は、このときに収集した史料を用いた点に特徴がある。書簡①の書き方からみて、両者は初対面ではなく、1906年から翌年にかけての帰国時に朝河とホールの交流は始まっていたのであろう。

ホールはマードック(James Murdoch 1856-1921)の『日本史』(*A History of Japan*)⁽¹⁰⁾第一巻について「その主題に関して、以前に書かれたもののほとんど全てを凌駕している」と高く評価した上で、朝河に読むように勧めている。同書は日本アジア協会から刊行されており、英文での日本関係図書の刊行も同協会の事業の一環だった。マードックはスコットランド出身で、第一高等学校などで英語や歴史を教えていたが、1917年にオーストラリア政府に招聘され、1919年にシドニー大学の初代日本学教授となった⁽¹¹⁾。その主著『日本史』は、英語圏での日本史概説の定番であり、朝河の『入来文書』でも参考文献に挙げられていた。

4、【書簡②】1915年9月5日付ホール書簡

1915年9月2日にロンドンに到着した朝河は、イギリスに帰国していたホールに面会を求めた。その返事が書簡②である。ホールは、8日(水曜)に昼食を一緒にとろうと朝河を自宅に招待した。このときの様子は「朝河貫一日記」に書かれている(原文英文、以下拙訳)。

(9月6日)「ホール卿から返事があった…ホールは私を水曜日の昼食に招待してくれた。」

(8日)「ホールを訪れて昼食をとった。勤勉(earnest)な人で、コントの崇拝者である。」

(16日)「ホールのもとで夕食をとった(49 Broadhurst Garden)。ホールのもう2人の娘にも会った。ホールは愛すべき老人である。」

ホールの家は書簡②に「メトロポリタンのフィンチリー通り駅から歩いて3分」とされるが、「日記」には49 Broadhurst Gardensという住所が記されている(書簡②③⑤の用紙には住所(49, BROADHURST GARDENS, HAMPSTEAD, N. W.)がタイプされている)。ホールは実証主義社会学の祖オーギュスト・コント(Auguste Comte)の崇拝者であった。

残念ながら、二度にわたる朝河とホールの会話の内容は明らかではないが、書簡③でも言及されるように、日本封建制に関する議論で盛り上がった蓋然性は高い。ホールと最後の晩餐をとった翌々日、9月18日に朝河はロンドンを発ち、アメリカに帰国した。

なお、書簡③の記述から判明するが、1915年9月当時、イギリス留学中の法学者の穂積重遠(1883-1951)がホールの助手となっていた。穂積重遠の父陳重は御成敗式目の写本の蒐集で知ら

れている。穂積の留学中の日記は穂積重遠著・穂積重行編『欧米留学日記（1912～1916年）』（岩波書店、1997年）として刊行されている。それによれば、1915年2月25日（木）に、日本郵船の箕作良次の紹介で穂積はホールに出会い、毎週木曜夜に「新編追加」（鎌倉幕府の法令集、編者・成立年代未詳⁽¹²⁾）の家庭教師をすることになった。ホールは「西洋人には珍しく小柄な好々爺」で、「日本の封建制度を英国の法学者・社会学者に紹介して比較研究の材料にしたい」と考えていた。「二十歳前後の娘さんが三人」⁽¹³⁾、日本から連れてきた日本人女中もいた。一方で、「ミドル・テンブルで法律を学んでコント派の社会学に興味を持ち、コントの提唱した「人道教」(Religion of Humanity 人類教)の信者で（3月24日）、「自分は熱心なキリスト教徒だったが、日本で儒教を研究してスッカリ宗旨替えをしてしまった。（中略）バイブルより先に論語を輸入したる日本は幸福なり」と語り、穂積に「不思議な異人さん」という感想を抱かせている（2月25日）。

朝河がホール宅で夕食をとった9月16日は、木曜日の夜にあたる。穂積の日記には16日の記述はなく、朝河も特に記していない。だが、書簡③でホールが特に断りもなく「穂積」と書いたことや、日本帰国途中の翌1916年1月14日、穂積がアメリカで朝河を訪問し、朝河の部屋で泊まっていることから⁽¹⁴⁾、二人がロンドンで面識を得ていた可能性は高い。

穂積の日記によれば、9月23日（木）に「ホールさん先週から目を悪くして今日も本を見ることができないから、僕が数段を朗読しながら説明した。折角の仕事だがこれでは中々捗るまいと気の毒になる。」、10月21日（木）に「後任に専門家ではないが人柄から加藤牧師をと思って、双方と相談中だ。」と記されている。10月28日（木）には「最後のホールさん」と書かれ、後任に「加藤牧師」を紹介したという。

5、【書簡③】1916年3月22日付ホール書簡

朝河が1915年2月12日のリンカーン協会における“Lincoln, America & Peace”という講演のコピーを送ってくれたことへの御礼である⁽¹⁵⁾。ホールはこれをパンフレットとして印刷して、大統領選を見越してアメリカ人に広く配布してはどうかと、朝河を煽っている。

それとともに1915年10月24日付の朝河の手紙（現存せず）への返事が遅れたことを詫びている。その手紙によって朝河の「専門的な仕事と文学的な活動」を知り、「制度と社会宗教史の講義の両者が出版されることを期待」する旨を伝えている⁽¹⁶⁾。英文の日本社会宗教史としては、姉崎正治がエンサイクロペディア・アメリカナ（*The Encyclopedia Americana*）に書いた概説があるくらいで⁽¹⁷⁾、もっと知りたいとホールは思っていた。

一方、ホールは、視力が回復しないために、「新編追加」の英訳がはかどらず、今の助手（加藤牧師）は前助手の穂積重遠ほど役に立たないとも愚痴っている。

ブリנקリー（Francis Brinkley 1841-1912）の『日本人の歴史』⁽¹⁸⁾に対する朝河の書評を読みたいと伝えている。同書へのロンドン・タイムズの書評をホールは朝河に送っていたが、その書評は自分ではなく、ロングフォード（Joseph Henry Longford 1849-1925）が書いたものであった⁽¹⁹⁾。

ブリנקリーは、アイルランドの名門出身で、日本公使館付武官補兼守備隊長として幕末の日本を訪れたが、日本人女性（水戸藩士の娘田中安子）と結婚して日本にとどまり、ロンドン・タイムズの特派員や「ジャパン・メール」の経営などジャーナリストとして活動し、日本美術鑑定家としても知られ、日本を広く海外に紹介した⁽²⁰⁾。ブリנקリーと菊池大麓の共著『日本人の歴史』に対して、ホールの評価は厳しい。「朝河貫一日記」によれば、1916年1月に『日本人の歴史』を読み終え、その書評を執筆している。マードックの日本史を越えるものではなく、そもそ

も史料に基づく研究ではないと、朝河による書評も厳しい（但し、英文の日本通史が他にないため、『入来文書』でも参考文献に挙げられている）⁽²¹⁾。

また、文脈は不明であるが、アメリカ人宣教師で、日本アジア協会のメンバーであったクレメント（Ernest Wilson Clement 1860-1941）⁽²²⁾ について、歴史家としては何の思い入れも期待もしていないと述べている。クレメントは太陰暦（旧暦）の日付を太陽暦に換算した「日本年代表」の著者として知られ、朝河も『入来文書』で引用している⁽²³⁾。1915年に『日本小史』⁽²⁴⁾ を刊行したクレメントへの言及が、先行する朝河の書簡にあったのだろうか。

プリンクリーへの書評を書いたロングフォードは、イギリスの日本領事館に1869年から1902年まで勤務し、初期の日本研究に重要な役割を果たした人物で、帰国後はロンドンのキングスカレッジにて日本語の教授となった⁽²⁵⁾。ホールとプリンクリー、そしてロングフォードの3人はほぼ同世代であり、20代で外交官（ないし外交官付きの武官）として幕末維新期の日本を訪れ、日本研究に従事した。ホールによれば、プリンクリーとは長年の親友であったが、ひどく疎遠になってしまったという。外交官が赴任した国の歴史・文化を研究するというのはイギリスの伝統であったが、3人のその後の人生は各様であった。

6、【書簡④】1917年12月2日付朝河書簡

1917年7月から1919年9月まで朝河は日本封建制論に関する史料調査のために日本に帰国していた。帰国当初の研究構想と作業について、朝河はホールに書簡を書き送っている（「日記」に引用）⁽²⁶⁾。以下この書簡の内容をまとめておく。

朝河は、日本において手稿史料に基づく封建制度の調査に従事していた。「貴方もお気付きであるように、日本封建制の研究は人類の社会的進化の比較研究において重要な位置を占めるはずで。というのは、西欧と日本は、封建制度が完全な成長を遂げただけでなく、十分な量の書かれた史料によって研究もできるという、（ただ）2つの場所であるからです。」という自負を伝えている。日本とヨーロッパは単に封建制度が発達したというだけではなく、文字史料の残存状況が豊富だという条件に注目していた。

朝河の研究手法は「重要な庄の歴史を一つずつ研究し、それらに共通するものを起源・成長・衰退の中を探り、これらの共通の特徴の現れる理由を考え抜く」というものであった。主要史料は個別の荘園に関する文書であり、巨大寺院の文書集成（cartularies）⁽²⁷⁾ の存在に注目していた。朝河は日本での調査のために1年の休暇を2年に延長してもらえるようにイエール大学に要望を出していることを伝えている（許可を得るのは12月10日）。

朝河はプリンストン大学出版会から日本封建制の古文書の翻訳を依頼されていた⁽²⁸⁾。そのために「典型的な古文書」を探していたが、その本には、ホールが以前英訳を出版した御成敗式目（貞永式目）についても、自分の手による新訳を載せたいという要望をもち、ホールの意向を伺っていた。同時代の史料や式目の写本類の校訂を踏まえた新訳を朝河は構想していたが、結局朝河自身が式目の英訳を作成することはなかった。

最後に、朝河は第1次世界大戦の戦況の感想を述べている。イタリアの敗戦（カポレットの戦い）とロシアの敗北（同年にロシア革命）が戦争を長期化させることへの懸念とともに、アメリカの参戦（1917年4月）を「天の賜物」と評価し、日本は国際社会でより大きな役割を果たすべきだと述べ、大戦に対する日本人の無知について歎いている。

7、【書簡⑤】1918年2月20日付ホール書簡

朝河書簡（書簡④）へのホールの返事である。「日本の封建法に関する私の如何なる翻訳も、貴方の自由に、貴方が好きなどころを使ってよろしいですし、使わなくてもよろしいです」と伝えられている。視力の低下とともに、「ロンドンでは日本にいた間のような役に立つ多くの助けを得られない」ために、ホールは日本封建法の英訳の仕事をやめてしまっていた。

また、ホールが「日本やヨーロッパのどちらの封建制度よりも古い中国の封建制に関する必要な研究をすることによって、貴方の仕事は複雑になるでしょう」と助言している点が興味深い。日欧よりも古い中国の封建制が、周代の「封建制」を指すのかどうかは未詳である。周代の「封建制」は郡県制に対比される中国の国制上の概念であり、主従関係を軸とする封建制（feudalism）とは異質な概念である。だが、明治期に西洋の封建制（feudalism）の訳語として選択されたこともあって、日本ではしばしば混同された。朝河はこのことに再三注意を喚起していた。二人の間で中国との比較が議論になったこともあったのだろう。

現存する朝河とホールの文通は書簡⑤で終わっているが、書簡⑤には「入来文書を利用するということを1919年12月28日に返事した。」という朝河の手書きのメモがある（「朝河貫一日記」の当該日条には言及がない）。1919年9月に日本調査を終えた朝河は、アメリカに帰国するとともに、『入来文書』執筆に向けた準備を開始したことをホールに伝えたのであろう（御成敗式目の英訳を行わないということも伝えたか）。

おわりに

以上の5通の書簡には、マードックやブリンクリーのような当時の英語圏の日本史研究者の名前が挙がっており、日本アジア協会に関わる歴史家たちの関係を知る史料でもある。朝河と彼らとの関係は、おそらくは1906年から1907年にかけての朝河の第1次帰国時に遡るものであった。

朝河とホールとの間では、日本封建制をどのように考えるのか、日本封建法の英訳について、たびたび意見交換がなされていた。1915年9月の朝河のロンドン訪問時には、ホールは鎌倉幕府法の英訳に取り組んでおり、朝河は二度もホールの自宅を訪問して議論を重ねていた。実際には面談が実現しなかったポロックと比べて、ホールは、ロンドン滞在中に朝河が最も実質的に学問的な議論をした人物であるといえよう。繰り返しになるが、はじめにで触れた問題に戻ると、朝河がロンドンで示唆を受けた「大家一両名」の一人はホールであると考えられる（イングランド法史の大家であるポロックと並べて「大家一両名」としたのは朝河の誇張であるが）。その後も朝河はホールを相談相手としようとするが、ホールのほうは1915年以降視力の低下によって研究からリタイアしてしまう。

比較史の方法論という点からは、書簡④において朝河自身の研究スタンスが表明されていることは注目される。一次史料（古文書）を分析する重要性が強調されており、一次史料に基づく個別研究に立脚して一般化を目指すというスタンスが示されていた。また、日欧比較のメリットとして、単に日本においても封建制度が発達したというだけではなく、日本における史料の残存状況が豊かであるという認識が示されている点も、朝河が日本封建制の基本史料としての「入来文書」の英訳を目指すに至った背景として興味深い。

何よりも「日本の経験との比較は、（ヨーロッパの歴史の）幾つかの重要な点を再評価し、それ以外の比較的重要な点を修正することで、ヨーロッパの歴史に新たな光をあてるであろう」とい

う朝河のことは、英語圏で日本史研究者として身を立てていた日本人の朝河にとって、単なる非西洋圏の情報提供者に終わらず、自らの研究によって欧米人自身の歴史認識に修正を迫る決意を示すものであったろう。書簡④が届いた時点ではホールは研究をやめてしまっていたようであるが、そうでなかったとしたら、こうした朝河の意志が、外交官として日本研究を始めたイギリス人のホールと如何に共有されたのかは興味深い問題である。

【付記】本稿の原型は「朝河貫一と J・C・ホール——日本アジア協会の歴史家たち」（『朝河貫一研究会ニュース』73号、2010年）であるが、全面的に改稿した。翻刻も新たに追加したものである。なお、本稿の作成にあたって、イギリス所在のホール関連の史料を調査することはできなかった。今後の課題としたい。

翻刻

【凡例】

◎各文書冒頭の番号横に次のように表記した。

朝河宛ホール書簡: Hall to Asakawa / ホール宛朝河書簡: Asakawa to Hall

◎その横に出典を注記した。 ABBREVIATION (略記)

Fukushima: Asakawa Kan'ichi Shiryo (朝河貫一資料), Fukushima Prefectural Library (福島県立図書館), Japan

Yale: Asakawa Kan'ichi Diary, Asakawa Papers, Manuscripts and Archives, Yale University Library, USA

◎タイプ打ちのものは出典の横に typed script と、手稿は manuscript と記した。

◎下線は原文のまま。

◎単語のつづりなどの些細なミスは、基本的に [] を用いて訂正した。原文ママとすべきと判断した個所については [sic] を付した。省略形は原形に戻した (govt.=government など)。

Letter 1: Hall to Asakawa 1911.3.13 (Fukushima, manuscript)

March 13th, 1911

Dear Dr. Asakawa[,]

I note with pleasure your kind promise to send me a copy of your Notes on Village government under the tokugawas when printed. I shall read them with great interest & give you any reflections that may occur to me on reading them.

Owing to the loss of our most efficient Hon. Secretary, Mr. Vickers. The A.S.J. Transactions do not appear with the same regularity as formerly, and it may be some weeks yet before my translation of the tokugawa laws is published; but when it does at length see the light I shall not fail to return your courtesy. It is only superficial work like that of which I am capable, as my eyesight is by no means good.

If you have not yet read Murdoch's History of Japan. Vol I. published by the A.S.J. you have a treat in store. To my mind it supersedes nearly everything previously written as the subject. Vol.III. is now ready for the printer.

Yours very truly[,]

J. C. Hall

Letter 2: Hall to Asakawa 1915.9.5 (Fukushima, manuscript)

September 5th/15

Dear Mr. Asakawa,

I am delighted to learn from your friendly letter that you are in London; and I hope we shall see each other often during your stay.

I shall be glad if you will come and have tiffin with me here on Wednesday next the 8th just at 1 o'clock. If you should be engaged elsewhere for that day, please name any other day of this week that may be convenient to you. The house is 3 minutes walk from the Finchley Road Station of the Metropolitan (Underground) Railway.

Yours Sincerely[,]

J. C. Hall

Letter 3: Hall to Asakawa 1916.3.22 (Fukushima, manuscript)

March 22nd/16

Dear Dr. Asakawa[,]

First of all I must thank you for sending me a copy of your admirable, eloquent & philosophical address to the Lincoln Society of 12th Feb. It ought to be printed as a pamphlet and circulated broadcast amongst Americans in anticipation of the coming Presidential election. Its vindication of Dr. Wilson's Moral Force policy cut the very ground from under Col. Roosevelt's feet in the wild anathemas which he hurled from Trinidad so soon afterwards. These appeared in my favourite newspaper, the Daily News & Leader, the very day your letter & speech came to hand.

In the next place I must apologize for my previous delay in replying to your preceding letter of 24th Oct. last, giving me a glance into your professional work & literary activities. I hope both your Institutional course and that on Social religious History will be published. On the latter subject the only work I have seen is Dr. M. Anesaki's outline for the Encyclopedia Americana, which whets one's appetite for more.

Owing to impaired eyesight I am doing very little work at the Shimpen Tsuika; and my present assistant is by no means of the same helpfulness as Mr. Hozumi; but I intend not to give up the work; though at the present rate it will take me some years to complete it.

I shall be eager to see your review of Brinkley's History when it appears. That in the London Times of which I sent you a copy was not by me; but by Professor Longford. I did not Review[sic] the book, as Brinkley and I, after being close friends for years, became estranged bitterly; and I think the work unworthy of his great abilities. Of Clement as a historian I have no conceit or expectation whatever.

With all good wishes for your health and vigour for your tongue and pen, believe me always.

Yours Sincerely[,]

J. C. Hall

Letter 4: Asakawa to Hall 1917.12.2 (Yale, manuscript)

Dec.2, '17. Sun. Gloomy weather, & hence give up excursion into the country that I planned. Write to Ōwaki. To John Carey Hall, London:-

“...I am in Japan on a leave of absence for a year, & am engaged in researches of feudal institutions from manuscript sources. These are abundant & invaluable. As you are aware, the study of Japanese feudalism should occupy an important place in the comparative study of the social evolution of mankind, inasmuch as western Europe & Japan are the two places in the world where feudal institutions not only had full growth but also may be studied from great quantities of written sources. I am even so bold as to think that a comparison with Japanese experiences will throw a fresh light upon European history: reinforcing some of its great points & modifying the relative importance of some others. From this point of view, the original sources I am investigating now do not seem to me mere records of past local events, but valuable human documents that should contribute data to the future science of the social life of man.

“My method of procedure is to study the history of important shō’s, one by one, & to see what is common to them – in origin, growth, & decay - & to think out the reasons for the existence of these common features. For this purpose, I have to delve into very minute points in an intensive way, though the purpose of doing so is to enable me to to[sic] generalize later when I get sufficient data for generalization.

“The chief sources, therefore, are documents relating to individual shō, especially those contained in the cartularies of great Buddhist Temples, like Tōji, Tōdaiji, Kōyasan, &c. A second set of sources is the diaries of nobles who were titular owners of shō. These are supplemented by the study of local histories & of contemporary records of the feudal classes. I am hoping that Yale may grant me two years, instead of one, for my researches in Japan.

“I have also been asked by the Princeton University Press to prepare a volume of Japanese feudal documents in translation. I am gradually finding good typical documents. That may be included in this selection, & the selection will have to be done with great care. I think that the Jō-ei shiki-moku, &c., some of wh. you have translated, should be included in the volume. Do you mind if I do so, & if I try a new translation in the light of what I get from contemporary sources and of the various copies of the shikimoku, &c., that I can compare here? I feel much hesitation about this matter, and would not do anything to give you displeasure. I beg you to write me frankly what you feel. If you object to my including a new translation of the material you have translated, I shall not do so, but refer to your translation, as the material is fundamental.

“The defeat of Italy & the defection of Russia will, I fear, prolong the war, & I hope England will hold out physically & financially till the end. This is the greater concern I feel, if I may speak frankly America’s entry into the war is a godsend. I for one wish Japan might be prevailed upon to do much more than she is doing though of course she should not take the initiative. I think strongly that for Japan the question of the hour is not China but the European war. This war, however, is remote for Japan, & the public thinking is in an unsatisfactory state. England needs to do educational work about the war here as much as in America on the colonies. The public here has not enough first-hand data, & does not know the most elementary thing...

Letter 5: Hall to Asakawa 1918.2.20 (Fukushima, typed script)

February 20th. 1918

【手書きによる補筆】「Reply Dec.28.'19 that the Iriki documents will be used.」

Dear Dr. Asakawa,

Best thanks for your most interesting letter of December 2. I sincerely trust that Yale will give you the full two years for your very important researches into the history and developments of the Sho. I am also greatly interested in your promised volume for the Princeton University of important feudal documents and I beg to assure you that any of my translations of the feudal laws of Japan are entirely at your service to make whatever use you like of them or no use, just as you please. I have no doubt you will be able to improve on my translation in many a passage as it would be very surprising indeed if a first translation should have been made without some mistakes.

My work in that line is now ended, as my sight is no longer what it was and I have not in London the many useful aids that I had while in Japan. So you have my hearty good wishes for the success of your very important investigations into the history of Japanese feudalism. I cannot but think, however, that you will find your task complicated by the necessary study of Chinese feudalism, so much older than the feudal systems of either Japan or Europe.

Please give my kindest regards to Professor Hozumi Shigeto when you meet him, [sic]

Yours Sincerely[,]

J. C. Hall

注

- (1) 1915年11月28日付の五十嵐力宛書簡（『朝河貫一書簡集』早稲田大学出版部、1990年、76号、241頁）。
- (2) 拙稿「朝河貫一と比較封建制論 序説——個人資料に基づく史学史研究の試み——」（『歴史評論』732号、2011年）。
- (3) Pierre Laffitte; translated by J. C. Hall, *A general view of Chinese civilization and of the relations of the West with China*, London and Tokyo, 1887. Pierre Laffitte; translated by J. C. Hall, *The positive science of morals: its opportuneness, its outlines, and its chief applications*, London, 1908.
- (4) 以上、武内博編著『増補改訂普及版 来日西洋人名事典』（日外アソシエーツ、1995年）446頁、斎藤多喜夫『横浜外国人墓地に眠る人々』（有隣堂、2012年）35-37頁、そして日本側の文献ではあまり注目されていないが、ホールは実証主義の支持者としても知られていたことは、*A biographical dictionary of modern rationalists*, London, 1920, p.321. および *Who was who*, vol.2: 1916-1928, London; Adam & Charles Black, 1962, p.453.
- (5) 同協会に関する説明は、同協会公式サイト（<http://www.asjapan.org/web.php/> 2017年5月15日最終閲覧）および協会の通史 Douglas Moore Kenrick, *A Century of Western Studies of Japan, the first hundred years of the Asiatic Society of Japan 1872-1972*, *Transactions of the Asiatic Society of Japan* 3rd ver. Vol. 14, 1978.（邦訳はダグラス・M. ケンリック著（池田雅夫訳）『日本アジア協会100年史：日本における日本研究の誕生と発展』横浜市立大学経済研究所、1994年）とともに、石田幹之助「日本アジア協会のこと——その過去と近況」（『石田幹之助著作集 第3巻 東洋学雑鈔』六興出版、1986年、初出1947年）、斎藤多喜夫「初期の日本アジア協会とその周辺」（横浜市中央図書館開館記念誌編集委員会編『横浜の本と文化』横浜中央図書館、1994年）、楠家重敏『日本アジア協会の研究 ジャパノロジーことはじめ』（日本図書刊行会、1997年）、秋山勇三「日本アジア協会と協会の紀要について」（『人文研究（神奈川大

- 学)』152号、2004年)。
- (6) K. Asakawa, Some Aspects of Japanese Feudal Institutions, *Transactions of the Asiatic Society of Japan*, vol. 46, 1918.
- (7) 朝河ペーパーズについては、拙稿「イエール大学図書館所蔵朝河貫一文書(朝河ペーパーズ)の基礎的研究」(『東京大学日本史学研究室紀要』13号、2009年)。福島県立図書館所蔵「朝河貫一文書」については、拙共著『朝河貫一資料 早稲田大学・福島県立図書館・イエール大学他所蔵』(山岡道男・増井由紀美・五十嵐卓・山内晴子との共著)(早稲田大学アジア太平洋研究センター、研究資料シリーズ 5、2015年)。
- (8) K. Asakawa, Notes on Villiage government in Japan after 1600, *Journal of American Oriental Society*, vol.30:pt 3; vol.31:pt.2. 1910-1911.
- (9) 前掲『増補改訂普及版 来日西洋人名事典』33頁、『慶応義塾百年史 別巻(大学編)』(慶応義塾、1962年)214頁以下、*Who was who in America*, vol.5, 1969-1973, Marquis Who's Who, p.744.
- (10) J. Murdoch, *From the origins to the arrival of the Portuguese in 1542 A.D. (A history of Japan; vol. 1)*, Asiatic Society of Japan, 1910. ちなみに第2巻は *A history of Japan: during the century of early foreign intercourse (1542-1651)* / by James Murdoch, in collaboration with Isoh Yamagata, Office of the "Kobe Chronicle", 1903. 第3巻は後述するロングフォードらの作業によってマードックの没後1925年に刊行された (*v. 3. The Tokugawa epoch, 1652-1868*)。
- (11) 前掲『増補改訂普及版 来日西洋人名事典』469頁以下、平川祐弘『漱石の師マードック先生』(講談社学術文庫、1984年)、*Who was who*, vol.2: 1916-1928, London; Adam & Charles Black, 1962, p761.
- (12) 当時利用可能な刊本は、『史籍集覧』(1883年刊行)など。
- (13) 穂積によれば長女はリリアン(ロンドン生まれ)、次女はエディ(長崎生まれ)、三女はコンスタンス(横浜生まれ)だが、未詳。但し、長女はロンドン生まれというから、それが正しいとすると、1881年生まれ34歳くらいではなかろうか。横浜外人墓地の墓碑銘によると、ホールとアグネスの結婚は1876年である。
- (14) 「朝河貫一日記」同日条。但し穂積の日記には帰国途上の記事はない。1月18日付の穂積の礼状が福島県立図書館所蔵「朝河貫一資料」に残されている(整理記号B-175)。
- (15) イエール大学図書館所蔵「朝河ペーパーズ」ボックス7フォルダ63に講演草稿。
- (16) 残念ながら、朝河の手紙の内容は不明であるが、ホールの返事から推察するに、「はじめに」で前述した1915年11月28日付の五十嵐力宛書簡のように、ヨーロッパ調査を踏まえた朝河の研究・教育の抱負を伝える内容のものではなかっただろうか。
- (17) 国立国会図書館所蔵の *The Americana: a universal reference library, comprising the arts and sciences, literature, history, biography, geography, commerce, etc., of the world*, 1911. (初版1904年)を参照した。なお、Anesaki Masahar, *Religious history of Japan: an outline with two appendices on the textual history of the Buddhist scriptures* という自家製本版(1907年)もある(東京大学総合図書館などで所蔵)。
- (18) *A history of the Japanese people: from the earliest times to the end of the Meiji era* / by F. Brinkley, with the collaboration of Baron Kikuchi (菊池大麓) New York; London: Encyclopædia Britannica, c1914.

(12)

- (19) ロンドン・タイムズ掲載の書評は *The Times Literary Supplement*, September 23, 1915. 本稿では詳述できないが、この時期のタイムズには日本関係の書評が散見される。
- (20) 伝記的研究は昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書 第13巻』(1959年)が網羅的である。他に前掲『増補改訂普及版 来日西洋人名事典』389頁以下、下村寅太郎「プリンクリーさん父子」(『明治の日本人』北洋社、1979年)など。
- (21) *The American historical review*, vol. 21, 1916, p. 600-601.
- (22) 前掲『増補改訂普及版 来日西洋人名事典』126頁、*Who was who in America*, vol.1, 1897-1942, Marquis Who's Who.
- (23) E. W. Clement, Japanese chronological tables: showing the date, according to the Julian or Gregorian calendar, of the first day of each Japanese month, from Tai-kwa 1st year to Mei-ji 6th year (645 A.D. to 1873 A.D.); With an introductory essay on Japanese chronology and calendars, *Transactions of Asiatic society of Japan*, vol. 37, 1910. 朝河の引用は『入来文書』1号文書注14参照。
- (24) E. W. Clement, *A short history of Japan*, University of Chicago Press, 1915.
- (25) 前掲『増補改訂普及版 来日西洋人名事典』571頁以下、*Who was who*, vol.2; 1916-1928, London; Adam & Charles Black, 1962, p.642.
- (26) 拙稿「朝河貫一と入来文書の邂逅——大正期の地域と歴史をめぐる環境——」(河西英通・浪川健治編『グローバル化のなかの日本史像——「長期の19世紀」を生きた地域——』岩田書院、2013年)207頁以下においても書簡④に言及した。
- (27) 朝河がここで cartularies という語を用いた含意は未詳。西洋中世史におけるいわゆる文書集成(カルチュレール)とは異なる。朝河は1917年9月から東京帝国大学史料編纂掛において東大寺文書や東寺百合文書の調査を開始していたが、原本に即した調査ではなく、謄写本や写本を利用したものだった。謄写本の形態に引きずられた表現だろうか。
- (28) 拙稿「『入来文書』の構想とその史学史上の位置——日欧の中世史研究からみて——」(海老澤衷他編『朝河貫一と日欧中世史研究』吉川弘文館、2017年)79頁以下。

(さとうゆうき 立教大学准教授)